



兵庫県環境部

Hyogo Prefecture
Environmental Management Department

令和7年11月7日
兵庫県環境部水大気課里海再生班

大阪湾ブルーカーボン生態系アライアンス（MOBA） 第3回ワーキング

1 事務局からの報告 兵庫県



- ・ MOBAロゴマークについて
- ・ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック
- ・ 大阪湾奥部での藻場創出モデル事業

○ MOBAロゴマークについて

デザイン作成者

三井住友海上火災保険株式会社・兵庫支店
野尻愛菜さん

アートディレクション

株式会社メディアクト

コンセプト

2つの海藻で大阪湾の楕円を表現しました。

「MOBA」の文字は消波ブロックをイメージした四角いテイストを採用。

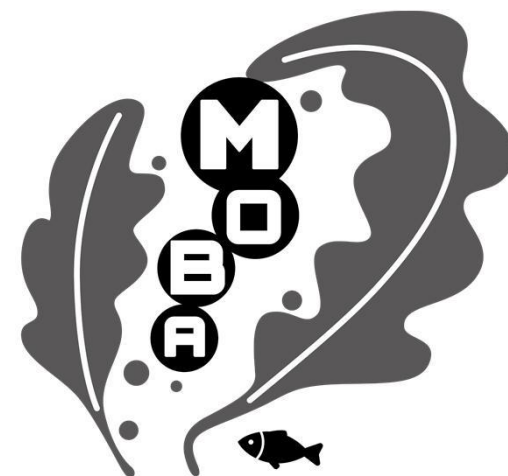
藻場が吸収するCO₂を気泡で表現し、全体をブルーカーボンを意識した青色でまとめました。

ロゴデザイン決定までの流れ

R6年12月頃	会員からシンボルとなるロゴが欲しいとの意見
R7年3月頃	会員9団体でロゴ検討チーム結成
R7年6/27～7/9	全80会員対象にロゴの原案募集（9案集まる）
R7年7/14	ロゴチーム内投票で3案に絞り込み
	(株)メディアクトが3案をアートディレクション
R7年8/4～8/19	会員投票により決定（得票率64%）



Members of the Osaka bay
Blue carbon ecosystem Alliance



Members of the Osaka bay
Blue carbon ecosystem Alliance

○ MOBAロゴマークについて

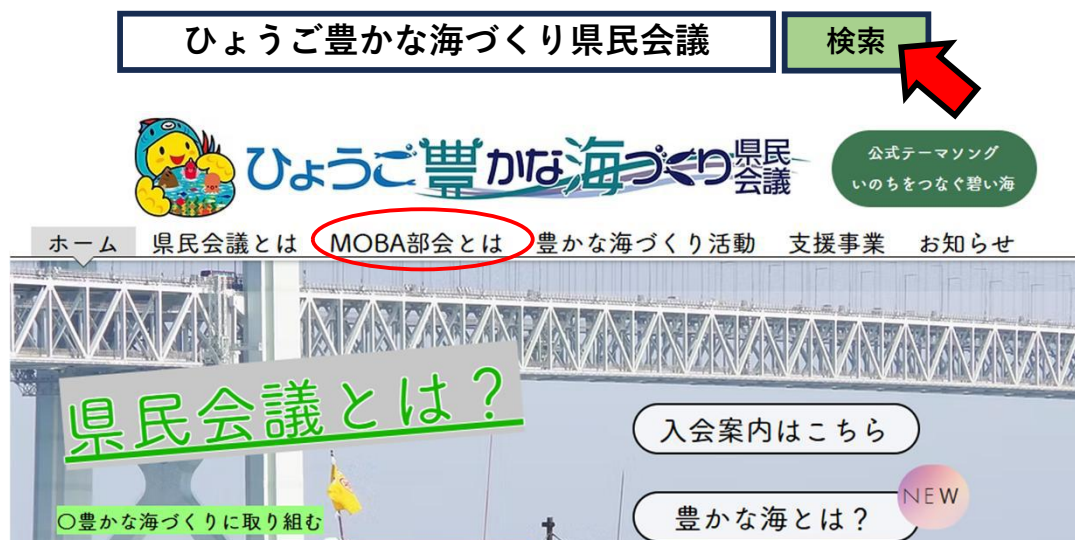
使用規定一部抜粋

(使用承認の申請等)

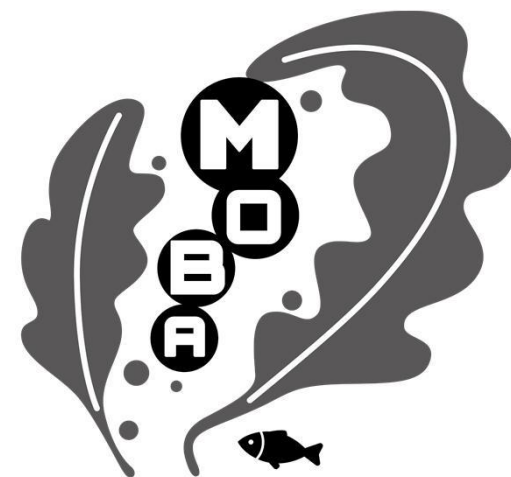
第3条 MOBAロゴを使用しようとする者は、あらかじめ「使用承認申請書」(様式第1号)に必要な書類を添付して、事務局(使用しようとする場所が大阪府内に限られる場合は大阪府環境農林水産部環境管理室環境保全課、兵庫県内に限られる場合は兵庫県環境部水大気課とし、これ以外の場合はいずれの課でも可とする。)に提出し、その承認を受けなければならない。ただし、次の各号のいずれかに該当するときは、この限りではない。

- (1) 大阪府又は兵庫県内の地方公共団体が使用するとき。
- (2) 大阪府又は兵庫県内の学校等が教育の目的で使用するとき。
- (3) 報道機関が報道及び広報の目的で使用するとき。
- (4) MOBA会員がMOBAの活動を普及啓発する目的で使用するとき。

使用規定・申請書はこちら



Members of the Osaka bay
Blue carbon ecosystem Alliance



Members of the Osaka bay
Blue carbon ecosystem Alliance

〇ひょうごブルーカーボン連絡会議（令和5年度～）

ブルーカーボンとして重要であり、水質浄化及び物質循環の機能も有する藻場等の保全・再生・創出を図るため、学識者、地域団体、企業、行政等からなる連絡会議を設置。

R6構成員（R7構成員は調整中）

区分	構成員候補
学識者	神戸大学特命教授 川井 浩史
	国立環境研究所主任研究員 島袋 寛盛
	徳島大学客員教授 中西 敬
地域団体	相生湾自然再生会議
	NPO法人アマモ種子バンク
	江井ヶ島漁業協同組合
	(一社)須磨里海の会
企業	兵庫県環境保全管理者協会（日本製鉄株式会社）
研究機関	兵庫県立水産技術センター
	兵庫県環境研究センター
国	環境省近畿地方環境事務所
	国土交通省近畿地方整備局
行政	神戸市、尼崎市、西宮市、芦屋市、
	明石市、加古川市、高砂市、播磨町
	姫路市、相生市、たつの市、赤穂市
	洲本市、南あわじ市、淡路市
関係機関	兵庫県漁業協同組合連合会
	大阪湾広域臨海環境整備センター
	(公財)ひょうご環境創造協会
事務局	兵庫県

〇 藻場再生・創出の促進

構成員間での情報交換、専門家からの助言、企業との連携を進めることにより、藻場の再生・創出の促進を図っている。

〇 藻場再生・創出ガイドブックの作成

令和6年度、アマモ場再生手法や法的手続き、護岸の状況、簡易な調査手法等を取りまとめたガイドブックを作成し、HP等へ公開した。

令和7年度は、活動団体に役立つ基礎読本（例：兵庫の海藻とブルーカーボン生態系）の作成を検討中



<令和7年度スケジュール（想定）>

11月頃

第1回連絡会議開催
基礎読本骨子（案）の検討

3月頃

第2回連絡会議開催
基礎読本（案）の検討
企業等での先進事例の紹介

○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

※無料でダウンロード可能です

ひょうご アマモ ガイドブック

検索

目次

はじめに	1
1 アマモ場とは	2
1.1 アマモの生態	2
1.2 アマモ場の役割	3
1.3 兵庫県内のアマモ場	5
2 アマモ場再生・創出の進め方	8
2.1 アマモ場再生・創出とは	8
2.2 候補地の状況を調べよう	10
2.3 アマモ場再生・創出について考えよう	16
2.4 計画を立てよう(Plan)	18
2.5 実行しよう(Do)	20
2.6 評価・検証し、改善しよう(Check, Action)	33
3 アマモ場再生・創出に関わる各種窓口など	40
3.1 アマモ場再生・創出活動の相談窓口	40
3.2 海岸保全活動団体(環境教育含む)一覧・活動区域 ...	41
4 アマモ場再生・創出事例など	44
4.1 先進的取組事例	44
4.2 沿岸域における自然共生サイトの認証事例	46
5 兵庫県におけるアマモ場再生・創出の実践事例集	49
参考情報	62
資料編	資-1



○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

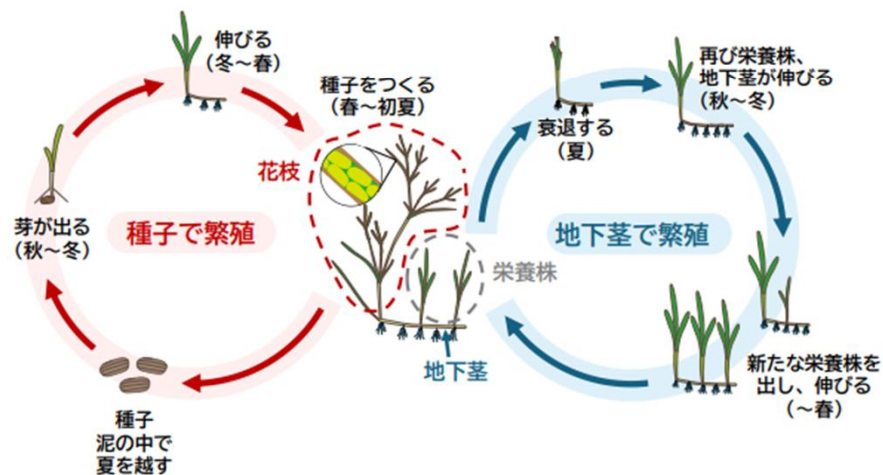
1 アマモ場とは

1.1 アマモの生態

アマモは海草(かいそう、うみくさ)と呼ばれる植物で、孢子などで繁殖する海藻とは異なり、花を咲かせて種子をつくります。また、水深が浅く、光のよく届く砂もしくは砂泥地を好みます。

アマモは、「種子」と「地下茎」の2つの繁殖方法を有しています。「種子」による繁殖方法では春から初夏にかけて花枝(生殖株)に種子をつくります。花枝から落ちた種子は泥の中で夏を越し、秋から冬に芽が出て、春まで成長を続けます。一方、「地下茎」による繁殖方法では、夏になると一部の葉は枯れ、草丈は短くなりますが、栄養株(草体)と地下茎は生き残り、秋から冬にかけては再び栄養株と地下茎が伸びてきます。その後、伸びた地下茎から新たな栄養株を出し、植生を拡大させていきます。

アマモは通常、この2つの繁殖方法を併用します。しかし、アマモにとって環境条件が厳しい場合などには、夏に栄養株と地下茎が枯れ、1年で寿命を終えることがあります。それでも、種子を残していれば、種子による繁殖のみで群落を維持できる場合もあります。

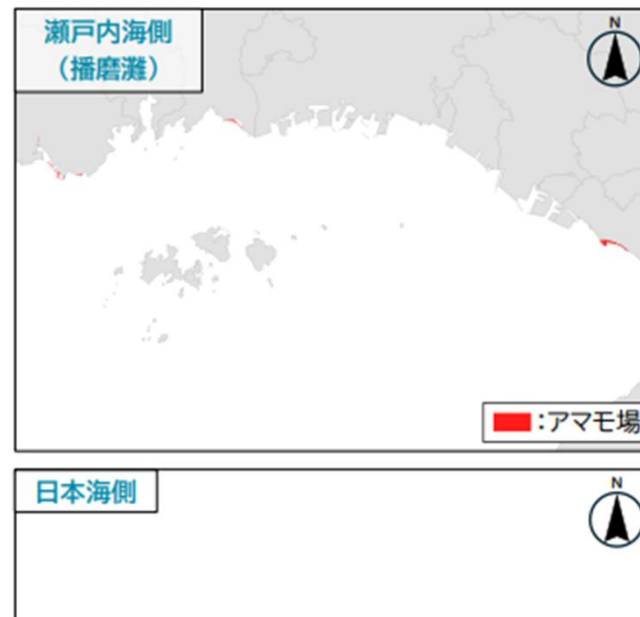


「アマモ類の自然再生ガイドライン」(水産庁・マリノフォーラム 21、H19)、
「アマモ場再生ハンドブック」(三重県水産研究所、H23)、
「ブルーカーボン 浅海における CO₂ 隔離・貯留とその活用」(地人書館、H29)を参考に作成

○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

1.3 兵庫県内のアマモ場

兵庫県においてアマモ場は、主に瀬戸内海側の須磨海岸以西に存在していますが、日本海側でも確認されています。アマモ場が確認されている場所の多くは、岸に近く、流れが穏やかな、底質が砂もしくは砂泥の場所です。参考までに、平成 29 年度から 30 年度にかけて兵庫県が実施した藻場調査におけるアマモ場の水平分布を以下に示します。なお、水平分布に示す場所以外にも、現在アマモ場が確認されている場所があります。



「平成 29 年・30 年度 兵庫県藻場調査結果」(兵庫県)より作成

※ アマモ場が確認された箇所のみを抜粋して表示

○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

2 アマモ場再生・創出の進め方

2.1 アマモ場再生・創出とは

過去にアマモ場が存在していたものの、現在は衰退または消滅している場所においてアマモ場を復活させることを、アマモ場の「再生」と呼ぶこととします。一方、過去にアマモ場が存在しなかった場所に、新たにアマモ場をつくることをアマモ場の「創出」と呼ぶこととします。

本章では、アマモ場再生・創出に必要な内容を、作業の順番に沿って整理しています。

アマモ場再生・創出を進めるにあたって、はじめにアマモが生育する環境を知る必要があります。アマモの生育に重要な環境条件を以下に示します。ただし、アマモの生育にはこれらの条件以外にも、**p.13**に示すような多くの要因が関係していることを理解しておく必要があります。

■ アマモまで日光が良く届く（水深が浅く、かつ干出しない）

水深が深すぎると、日光が届かずにアマモの成長が悪くなるため、水深の浅い海域を選びましょう。逆に、浅すぎて干潮時に干出してしまう場所だと、アマモが枯死してしまうことがあります。

■ 海況が穏やかである

潮の流れが速く、波が高いほど、アマモの種や栄養株が流失しやすくなります。一方、潮の流れがほとんどないような場所では、アマモの葉の上に珪藻や浮泥などが堆積して光が遮られたり、水中の酸素が不足してしまうことがあるため、アマモは十分に育ちません。アマモが育つためには、一定の流れが必要ですが、潮の流れが速くない穏やかな海域を選ぶ必要があります。

■ 底質が砂泥である

底質を構成する土粒子が粗すぎたり、細かすぎたりすると、種子や栄養株の定着が悪くなります。アマモの生育には、砂や少し泥が混ざった砂の底質が好ましいです。

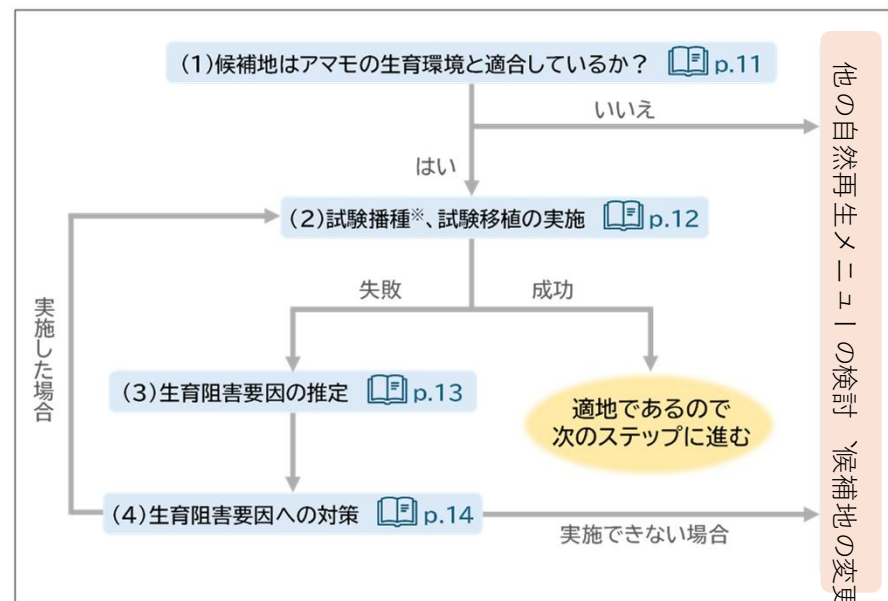
「アマモ場造成マニュアル」(熊本県、H26)、「海の自然再生ハンドブック-その計画・技術・実践-第3巻 藻場編」(海の自然再生ワーキンググループ、H15)を参考に作成

2.2 候補地の状況を調べよう(資料収集、検討)

事前に資料を集めたり、現地で調査を行うことにより、候補地がアマモの生育に適しているかどうかなど、候補地の状況を調べましょう。

候補地の状況の簡易な調べ方の一例を下図に示します。また、次のページ以降に下図の(1)～(4)の各項目についての具体的な調査手法を示しています。

より詳細な調べ方については、「アマモ類の自然再生ガイドライン」(水産庁・マリノフォーラム 21、H19) p.3-5～などに記載があります。



※播種：種をまくこと

候補地の状況の簡易な調査フロー



その場所に過去にアマモ場があったかどうか、生育環境として適しているかの判断材料の1つになるよ！

○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

2.4 計画を立てよう(Plan)

2.4.1 兵庫県内の主なアマモ再生・創出手法

アマモ場再生・創出は、海域の特性、コスト、活動参加者のスキルなどを踏まえ、様々な手法で実施されています。兵庫県内では、主に以下の手法が実施されています。

兵庫県内で実施されている主な再生・創出手法

分類	手法	概要	出典
播種 (※1)	播種シート法	ヤシ繊維マットや生分解シート、金網でアマモの種子をはさみこんだ「播種シート」を海底へ設置する手法	I)
	ガーゼ団子法	海砂などでつくった団子の中にアマモの種子を入れ、ガーゼで包んで綿糸などで口を縛った「ガーゼ団子」を、海上から投入するなどして、海底に播く手法	I)
	アマモバック法	アマモの種子とともに支持材として砂、小砂利、麻繊維や小石おもりをガーゼに包んだ「アマモバック」を、海上から投入するなどして、海底に播く手法	II)
移植	ポット法	海砂を入れた生分解性のポットにアマモの栄養株を植え、ポットのまま海底に植える手法	III)
	粘土結着法	アマモの栄養株の地下茎に、炭酸カルシウムを主成分とする生分解性の粘土を巻き付け、おもりとして海底に植える手法	IV)
	竹串法	アマモの栄養株の地下茎を輪ゴムで竹串や割り箸などに固定し、海底に突き刺すように植える手法	IV)
幼苗移植 (※2)	容器育苗ポット法	海砂とアマモの種子を p.28 に示すような生分解性繊維製の育苗ポットに入れ、海水を満たした容器で育苗し、育った幼苗をポットのまま海底に植える手法	—

※1 播種：種をまくこと

※2 幼苗移植：種子から育てたアマモの幼苗(幼い苗)を海中に移植すること

I) 「アマモ場再生ハンドブック」(三重県水産研究所、H23)

II) 「豊かなアマモ場再生支援事業」(吉松ら、H19)

III) 「アマモ場造成マニュアル」(熊本県、H26)

IV) 「アマモ類の自然再生ガイドライン」(水産庁・マリノフォーラム 21、H19)

2.4.2 アマモ場再生・創出手法の比較

兵庫県内で多く実施されている播種シート法、ガーゼ団子法、容器育苗ポット法について、難易度、コスト、適応場所などを比較しました。また、各手法の具体的な作業手順については、「2.5.1 アマモ場再生・創出手法の具体的な手順」に示しています。

アマモ場再生・創出手法の比較

	播種		幼苗移植
	播種シート法	ガーゼ団子法	容器育苗ポット法
準備時の難しさ	やや難しい マットの大きさによっては場所と人手が必要	易しい 特別な技術や道具を必要とせず、誰でも簡単にできる	難しい 陸上で種子から幼苗を育てる必要あり
播種・移植時の難しさ	難しい 基本的には潜水作業が必要	易しい 護岸、船上などから投入可能	難しい 基本的には潜水作業が必要
コスト	高い 材料：ヤシ繊維マット、生分解シート、金網など	低い 材料：ガーゼ、綿糸など	やや高い 材料：容器、海水、ポットなど
適応場所	シートを海底に固定するため、波の影響を受けやすい場所でも可能	ガーゼ団子が流される可能性があるため、波の影響を受けにくい場所で行う必要あり	ポットのまま移植するため、波の影響を受けやすい場所でも可能
実施場所の把握	易しい マットの位置や目印を置くことで把握可能	難しい ガーゼ団子が流される場合などは困難	易しい 目印を置くことで把握可能

○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

種子の用意

①花枝の採取

花枝の採取方法には、「①-1流れ藻から花枝を採取」、「①-2 アマモ場に入り花枝を採取」の2つの方法がありますが、採取元のアマモ場へ及ぼす影響が小さい「①-1流れ藻から花枝を採取」の方法で実施をすることが望まれます。

①-1 流れ藻から花枝を採取

【時期】5～7月頃

【道具】容器(花枝の一時保管用:ネット袋、バケツなど)、木の棒、熊手

【手順】

1. アマモの流れ藻(ちぎれて海面を漂っているもの)を木の棒の先端に熊手を付けた道具などで岸壁、船上などから回収し、その中から花枝(花を咲かせて種子をつける枝)を選別します。なお、流れ藻は砂浜などに打ちあがっている場合もあります。



花枝の見分け方

花枝には写真のように種子がついています。
また、栄養株と比べて、白く長い茎を持つという特徴があるため、その点に着目して見分けることが可能です。



栄養株



花枝の拡大写真



花枝

○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

2.6 評価・検証し、改善しよう(Check, Action)

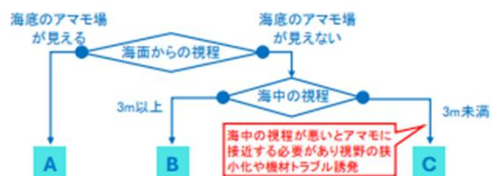
2.6.1 アマモ場のモニタリング

(1) アマモ場分布のモニタリング

播種・移植の実施後は、定期的にアマモ場の面積や被度(ある区画を真上から見た際に、区画の面積に対してアマモが占める面積の割合を百分率などで表したもの)をモニタリングし、状況を把握することが重要です。アマモ場の面積や被度をモニタリングする方法は様々ありますが、下図に代表的な方法を、次のページに被度の例を示します。

また、アマモ場再生・創出の目的によっても、適切なモニタリング方法は異なります。例えば、ブルーカーボン量を算定する場合であれば、精度の高い手法が望ましい一方、豊かな海を目指して活動を行っている場合であれば、必ずしも高精度な手法である必要はありません。

モニタリング方法は、環境タイプや活動の目的、難易度などを考慮して、適切な方法を選びましょう。



調査方法	データの取得場所	環境タイプ			調査範囲の広さ	位置情報の精度 ^{※1}	取得できる情報 ^{※2}	留意事項等
		A	B	C				
陸上作業	空中ドローン	●			高	広域	高	・撮影画像の補正が必要 ・周辺に生えている海藻などとの区別が困難(大まかな分類は分かる可能性あり)
	船上目視(箱めがね)	●			低	地先まで	高	・船が必要
陸上作業	水中ドローン	●	●		中	地先まで	低	・アマモ場の位置・範囲に応じて船が必要 ・映像確認・位置情報付加
	ケーブル水中カメラ	●	●		中	広域	高	・船が必要
	音響測量	●	●	●	高	広域	高	・船が必要 ・データ解析が必要 ・周辺に生えている海藻などとの区別が困難(大まかな分類は分かる可能性あり)
潜水作業	シュノーケリング	●			低	地先まで	高	・アマモ場の位置・範囲に応じて船が必要
	マンタ法	●	●		中	広域	高	・船が必要
	潜水目視(スキューバ)	●	●	●	中	地先まで	低	・アマモ場の位置・範囲に応じて船が必要 ・映像確認・位置情報付加

※1 調査時にGPS等でデータ取得場所の緯度経度を取得できる場合に高いと判断

※2 「広域産場モニタリングの手引き」(水産庁、R5)を参考に記載

○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

2.6.2 アマモ場の利活用

再生・創出したアマモ場は、多様な主体により利活用していくことが望まれます。兵庫県におけるアマモ場の利活用事例は以下のとおりです。また、利活用にあたっては、アマモ場が衰退しないよう適切なルールを定めることも重要です。アマモ場の利活用にあたっての課題とルールの例を p.38 に示します。

■アマモ種子採取イベントの例(江井島海岸)

江井島海岸では、大潮の干潮時には海岸から歩いてアマモ場に入ることができます。そこで、6月頃に市民などと一緒にアマモ場へ入り、アマモの種子が付いた花枝を採取しています。



■アマモの播種イベントの例(相生湾)

岸壁があり海へ立ち入ることができない場所では、地元の小学生などと一緒にアマモの種子が入ったガーゼ団子を海へ投入しています。



港内や岸壁付近などでイベントを実施する際は、海中への転落事故などに十分注意し、ライフジャケットの着用、上陸できる階段やハシゴの設置場所の確認、緊急連絡先の確認など安全対策を徹底してください。



○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

3 アマモ場再生・創出に関わる各種窓口など

3.1 アマモ場再生・創出活動の相談窓口

アマモ場再生・創出活動についての相談窓口を以下に示します。活動で何かお困りのことがあれば、近くの相談窓口にご連絡ください。

アマモ場再生・創出活動(環境保全)についての相談窓口

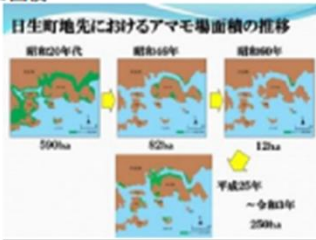
市町名など	担当部局	連絡先
尼崎市	経済環境局環境部環境保全課	06-6489-6305
西宮市	環境局環境総括室環境保全課	0798-35-3809
芦屋市	市民生活部環境・経済室環境課	0797-38-2050
神戸市	環境局自然環境課	神戸市 HP 問い合わせフォームに連絡
明石市	環境産業局産業振興室豊かな海づくり課	078-918-5254
播磨町	住民協働部産業環境課	079-435-2721
加古川市	環境部環境政策課	079-427-9769
高砂市	生活環境部環境経済室 産業振興課	079-443-9031
姫路市	農林水産環境局環境政策室	079-221-2462
たつの市	市民生活部環境課	0791-64-3150
相生市	市民生活部環境課	0791-23-7131
赤穂市	市民部環境課	0791-43-6821
淡路市	市民生活部生活環境課	0799-64-2523
洲本市	市民生活部生活環境課	0799-24-7607
南あわじ市	産業建設部水産振興課	0799-43-5243
日本海海域	兵庫県環境部水大気課里海再生班	078-362-3468

(令和7年3月時点)

○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

4 アマモ場再生・創出事例など

4.1 先進的取組事例

事例番号 1	
タイトル	日生におけるアマモ場創出の取り組み
団体	日生藻場造成推進協議会(漁業者、漁業関係者、NPO 法人里海研究会議)
場所	岡山県備前市日生地区
期間	1985 年～
内容	<p>【背景、概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和 20 年代、沿岸域に 590ha のアマモ場が広がっていたが、昭和 60 年にはわずか 12ha に減少 ・昭和 60 年に沿岸域で漁を行う壺網漁業者を中心にアマモ再生活動を始めた。壺網漁業者の減少に伴い、平成 21 年に活動組織を設立し、藻場の保全活動を開始 <p>【活動内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アマモ花枝の採取：6 月初旬に花枝の付いたアマモの流れ藻を集め、保管袋で保管 ・10 月初旬に保管袋を引き上げアマモの種を比重選別 ・選別した種を造成区域に播種 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アマモ場の面積は昭和 60 年は 12ha だったが、現在は分布区域の変動はあるものの 250ha まで回復  <p>アマモ場の面積の推移</p>
活動の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・アマモ場の回復により、藻場に生息するヒイラギ、モエビ、コウイカ類の漁獲量が僅かではあるが上向きになった ・活動当初はアマモが順調には生育しなかったが、ゼオライト、牡蠣殻を用いて底質を改良し、アマモが繁茂するようになった ・アマモ場造成活動を行い、瀬戸内海的环境保全を推進する目的で、4者協定(岡山県、日生町漁協、おかやまコープ、NPO 里海づくり研究会議)を締結し、コープ組合員のアマモ場造成活動への参加、アマモについての DVD を制作し岡山県内の小学校に配布するなどの取り組みを実施 ・アマモが最繁茂期に切れて流れ、航行の妨げや、計画外の場所(港湾内)への漂着などの問題が発生したため、流れ藻回収大作戦を実施
参考文献	<p>1)「水産多面的機能発揮対策情報サイト ひとうみ.jp」 (https://hitoumi.jp/torikumi/wp/jisseki/2484)</p> <p>2)「令和 5 年度ひょうごブルーカーボン連絡会議(第 2 回)資料」(兵庫県、R5)</p>

○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

事例 1

一般社団法人 須磨里海の会

須磨里海の会は、須磨海岸とその周辺の海を豊かにする生態系や生物種の再生と保全への取り組みを通じて、人々の海への関心を高め、人々を海に誘い、漁業が盛んな恵み豊かな里海を次代に継承することを目的として設立されました。

この目的を達成するため、企業や地元の学校と協力した海での体験学習会、アサリの保護活動、アマモ場を含めた藻場再生活動、底質環境の保全活動などを実施しています。



アマモ場再生・創出活動の概要

2021年から、須磨海岸においてアマモ場の再生・創出活動を実施しています。主な活動として、アマモの播種・移植、モニタリング、競合生物の駆除、生物観察会、播種・育苗の体験会、アマモ場を用いた環境体験学習などを行っています。

また、播種・移植については、播種シート法、ガーゼ団子法などを中心として実施をしています。

体験談 1 取り組みの原点

神戸市立須磨海浜水族園の元園長で、現在は須磨里海の会の代表理事を務める吉田裕之氏は、漁業者から「須磨海岸で昔のようにアサリがとれなくなった」という声を聞き、2010年から須磨海岸のアサリについての調査を開始し、調査を通じて漁業者との信頼関係を築いてきました。また、須磨海浜水族園という市民、行政などとの繋がりのある基盤を活かし、多様な主体と連携して須磨の海を豊かにするために須磨里海の会を設立しました。様々な人が利用する海岸は多くの規制がありますが、それでもアマモ場再生・創出活動を含む多岐にわたる活動が実現できているのは、須磨海浜水族園という土台と、各主体との間に構築した信頼関係があるからだと考えています。

○ ひょうごアマモ場再生・創出ガイドブック（一部をご紹介）

事例 2

「アマモは海のゆりかごだ！」プロジェクト

（ヒアリング対象：江井ヶ島漁業協同組合）

本プロジェクトは漁業環境の向上、水質改善、海岸環境の保全を目的として、江井ヶ島漁業協同組合、東洋建設株式会社、NPO法人アマモ種子バンクが協働し、アマモ場再生・創出活動を実施しています。



アマモ場再生・創出活動の概要

2001年から、江井島海岸周辺を中心にアマモ場の再生・創出活動を実施しています。主な活動として、アマモの播種・移植、モニタリング、植食生物の駆除、種子採取・保管、生物観察会、アマモ場を用いた環境体験学習などを行っています。

また、播種・移植については、播種シート法、ガーゼ団子法などを中心として実施をしています。

※「えいがしま」は江井ヶ島と江井島が混在しています。漁業協同組合や港については「江井ヶ島」が、海岸については「江井島」が用いられています。

体験談 1 アマモ場再生・創出を始めた経緯

江井ヶ島漁業協同組合（以下、江井ヶ島漁協）、東洋建設株式会社、NPO 法人アマモ種子バンクの三者によるアマモ場再生・創出の始まりは、東洋建設株式会社が江井ヶ島漁協に、谷八木地先で播種シートを設置したいと話を持ってきたことがきっかけでした。その頃は、周辺の海域にはアマモはぼつぼつと生えていましたが、今のように生い茂るような状態ではありませんでした。

東洋建設株式会社からは、ノリの養殖が盛んな江井島海岸周辺では、アマモ場をつくることでノリの収穫時にアマモが混入してしまう可能性があるなど、漁業への影響についても説明がありました。しかし、漁業者としては魚を守り、増やしていくことの重要性を感じていたため、共にアマモ場再生・創出を行うことを決めました。江井ヶ島漁協が取り組みに協力することで、周囲の理解を得やすくなり、取り組みも前進していきました。

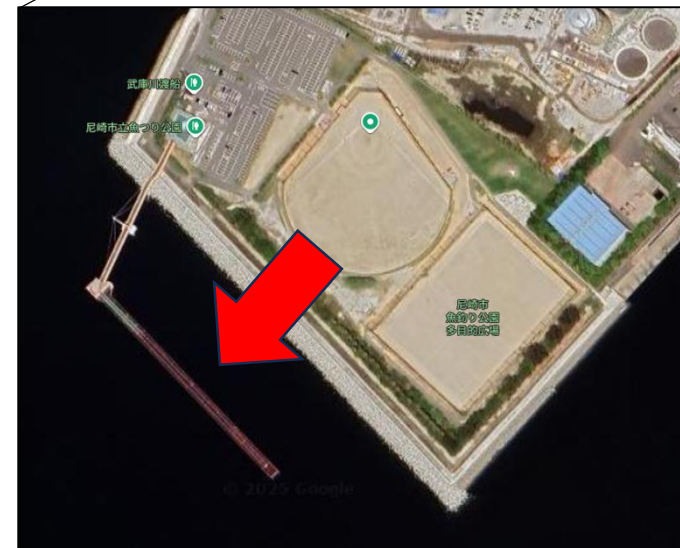
藻場・干潟保全・再生・創出推進事業及びブルーカーボンクレジット化推進事業

○大阪湾奥部での藻場創出モデル事業（令和7年度～）

大阪湾MOBAリンク構想の実現を目指し、大阪湾奥部において藻場創出のモデル事業を実施する。

＜具体的な実施方法やスケジュール＞

- ・ 尼崎市立魚釣り公園の栈橋で実施
- ・ （株）**BLUABLE**が用意した基質（ワカメの種糸付き）とセンサーを栈橋から垂下し定期的にモニタリング
- ・ 11月頃から実施予定

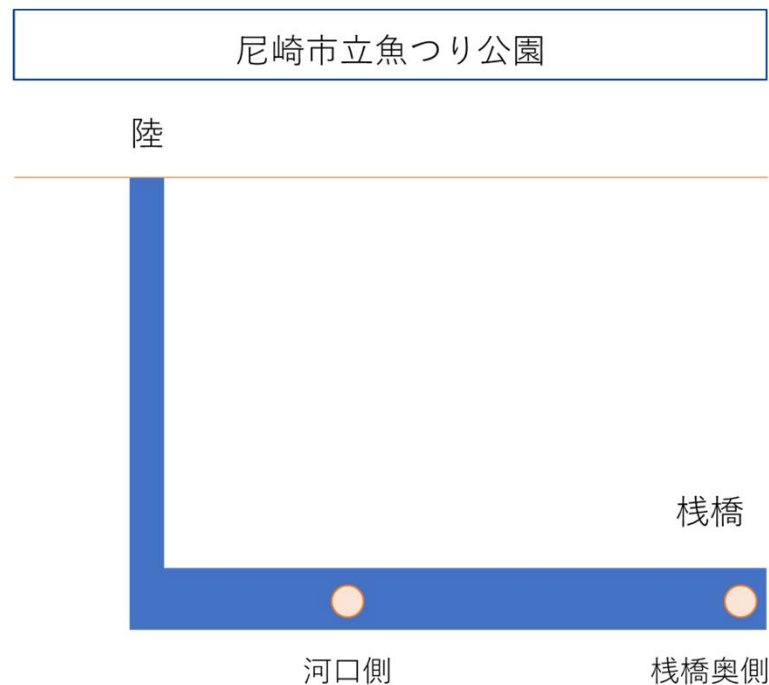


藻場・干潟保全・再生・創出推進事業及びブルーカーボンクレジット化推進事業

○大阪湾奥部での藻場創出モデル事業（令和7年度～）

＜実施地点＞

- ・ 河口側、栈橋奥側の2地点で実施
- ・ 各地点に設置する数は検討中



＜設置イメージ＞

- ・ 種糸ロープは「ワカメ」を想定
- ・ 基質2個を垂下したロープを15本設置
- ・ 基質に種糸ロープを4本設置
- ・ センサーを2層に設置し水質データを収集

